HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	アイヌ語人称接辞a／anの日本語への翻訳に関する基礎的考察
著者	桃内，佳雄；MOMOUCHI，Yoshio
引用	北海学園大学工学部研究報告(39)：95-112
発行日	2012-02-14

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

アイヌ語人称接辞a／anの日本語への翻訳に関する基礎的考察

桃　内　佳　雄*

Ainu–Japanese Translation of Ainu Personal Affixes「a/an」

Yoshio MOMOUCHI*

あらまし

アイヌ語の人称接辞a/anには，いくつかの異なる用法がある．田村[1]は，アイヌ語沙流方言における人称接辞の一覧表を作成し，a/anの用法として，包括的一人称複数，引用の一人称，二人称敬称，不定人称という四つの用法を分類している．本報告では，これらの用法の具体例を調査検討し，人称接辞a/anの日本語への翻訳のための基本的な方略について考察する．最終的に得られた方略は，［人称接辞a/anの日本語訳はφ化する］を基本規則として，これに例外規則を追加するという構成である．アイヌ語日本語機械翻訳システムの構築のための一つの基礎的な方略を確認することができたと考える．

1．はじめに

アイヌ語の人称接辞a／anには，いくつかの異なる用法がある．中川[2]は，人称接辞a-をめぐる諸論について考察を進め，a／anの用法をめぐる基本的な考え方の変遷と問題点の指摘を行っている．そこで取り上げられている田村[1]による提案は，アイヌ語沙流方言における人称接辞の一覧表を作成し，a／anの用法として，包括的一人称複数，引用の一人称，二人称敬称，不定人称という四つの用法を分類するというものである．同じa／anという表現形で，異なる用法（意味）があることになり，日本語への翻訳においては，これらを区別して処理する必要がある．また，日本語への翻訳において，対応する翻訳表現を明示的に表現するか，省略（φ化：ゼロ化）するかということも考える必要がある．どれに対応するかは，基本的には文脈・状況からの情報によって判断せざるを得ない．どのような文脈・状況からの情報が手がかりとなるか具体的な例に基づいて解析し，日本語への翻訳のための基本的な方略の構成を試みる．

* 北海学園大学工学部電子情報工学科
* Department of Electronics and Information Engineering, Faculty of Engineering, Hokkai–Gakuen University

最終的に得られた方略は，［人称接辞a／anの日本語訳はφ化する］を基本規則として，これに例外規則を追加するという素朴な構成であるが，アイヌ語日本語機械翻訳システムの構築のための一つの基礎的な方略を確認することができたと考える．

2．人称接辞a／anの用法

2.1 人称接辞a／anの用法の分類

人称接辞a／anの基本的な四つの用法と具体例を以下に示す．四つの用法の類型は，田村[1]のアイヌ語沙流方言における人称接辞の一覧表に基づいている．具体例は，主として，対訳コーパスEXP（文献[3]より作成；exp），UPA（文献[4]より作成；upa）と切替によるアイヌ神謡集辞典[5]（yuk）を参照している．具体例の構成は，［＜番号＞具体例，単語直接翻訳，原著訳］の３要素構成である．また，具体例は分類項目の後に一括して示している．さらに，３章での考察のために，原著訳に，a／anの出現に対応して，a／anの日本語訳が省略（φ化）されているかどうかを［　］で括ってまとめている．また，人称接辞の日本語訳に格助詞（が，の）は付与せずに表記している．

（１）包括的一人称主格（複数）:（聞き手を含む）私達が

① 包括的一人称他動詞主格（複数） a：（聞き手を含む）私達が

② 包括的一人称自動詞主格（複数） an：（聞き手を含む）私達が

＜１＞cep a=supa wa a=e ro ！ （exp06003）

魚 私達＝煮る て 私達＝食べる よう ！

魚を煮て食べよう！［φ，φ］

＜２＞tanto ku=nepki kusu , nisatta sinot=an ro . （exp05004）

今日 私＝働く から，明日 遊ぶ＝私達 よう .

今日は仕事をするから，明日遊びましょう．［φ，φ］

（２）引用の一人称主格（単数／複数）:私が／私達が

① 一人称他動詞主格（単数／複数） a：私が／私達が

② 一人称自動詞主格（単数／複数） an：私が／私達が

＜３＞kuneywa ku=macihi " a=sapa arka wa hopuni=an ka eaykap "

sekor hawean kusu , kani patek k=ek ruwe ne . （exp18002）

朝 私＝家内 「 私＝頭 痛い て 起きあがる＝私 も できない 」

と 言う ので , 私 だけ 私＝来る の だ .

朝，家内が「頭が痛くて起きられない」と言うもんだから，ぼくだけ来たんだ．

［φ］

この例で，「a=sapa（私の頭）」のaは引用の一人称所有格（単数）の例である．

＜４＞a　eoripak　ki　wa　ne　yakka　tanto　anak　（yuk01088）
私　恐れ慎む　する　て　である　けれど　今日　は
畏れ多い事ながら今日はもう［φ］

（３）二人称敬称主格（単数／複数）:あなたが／あなたがたが

①　二人称敬称他動詞主格（単数／複数）　a：あなたが／あなたがたが

②　二人称敬称自動詞主格（単数／複数）　an：あなたが／あなたがたが

＜５＞ku=monasap　hikusu　，　a=ekanok　kusu　soyenpa=an　ciki　tonoto
a=hok　yak　pirka　．　（exp10004）
私＝忙しい　ので　，　あなた＝出迎える　ために　外へ出る＝あなた　ならば　酒
あなた＝買う　と　よい　．
私は手が離せないから，迎えにいらっしゃるんだったら，お酒を買ってきてくださらない.［φ，φ］

（４）不定人称主格:（一般に）人が／誰かが

①　不定人称他動詞主格　a：（一般に）人が／誰かが

②　不定人称自動詞主格　an：（一般に）人が／誰かが

＜６＞kamuy　or　wa　aynu　a=rayke　oruspe　ku=nu　amkir　．　（exp09003）
クマ　により　て　人間　誰か＝殺す　話　私＝聞く　ことがある　．
クマに人が殺された話を聞いたことがあるよ.[φ][受動化]

＜７＞ihuraye=an　oka　ta　nupki　anakne　iteki　pet　or　un　kuta　sekor
ku=kor　huci　hawean　．　（upa02008）
洗濯する＝人　後　に　汚れ水　は　な　川　所　へ　あける　と
私＝持つ　おばあさん　言う　．
洗濯のあと汚れ水は川に決して捨ててはいけないと祖母は言います.［φ］

田村[1]では，人称代名詞と人称接辞について，方言（沙流方言，十勝方言，石狩方言）によって表現と用法が異なることが一覧表の形でまとめられている．その中から人称接辞a／anの部分を抜き出して箇条書きすると次のようになる．用法が四つの類型に分類されている．

・沙流方言：a／an：包括的一人称複数；引用の一人称　；二人称敬称　；不定人称
・十勝方言：a／an：包括的一人称複数；　；二人称敬称　；不定人称
・石狩方言：an／an：包括的一人称複数；物語中の一人称　；二人称敬称　；不定人称

引用の一人称と物語中の一人称について，田村[6]は，引用の一人称を物語中の一人称より一般的なものとして捉えている.『叙事詩や昔話など口頭伝承文学においては，１人称の代名詞としてasinuma（単），aoka（複），接辞としてa-，-an（主格），i-（目的格）が用いられる.』として，『叙事詩や昔話などの中で「私」というのはその中の登場人物であって，語り手自身では

ない．実際そういった口承文学の多くは，・・・その全体が―たとえ語りおえるのに二晩もかかる長いものであろうとも―引用句をなしているのである．だからその中の１人称を表すのは当然引用の１人称の形式となる.』と述べている．物語中の一人称は，引用の一人称に含めて考えることができるということであろう．

切替[5]は，アイヌ神謡集辞典において，人称接語a／anについて，次のような用法（意味）とアイヌ神謡集からの具体例の集約を行っている．

『a［人称接語］(主格形，二項動詞，三項動詞の前に置かれその主語となる．an[2]，i[2] 参照；名詞所属形の前に置かれ所有者を示す)

［１］人（不定人称)(いわゆる受身の文に用いられることがある)

［２］私（たち）が（一人称．対話文の中にのみ認められる．地の文ではci[2]がこれに代わる．しかし，会話文の中であっても，ci[2]が一人称を示すことがある．つまり，地の文　ci　会話文　ci~a　ということになる)

［３］私（たち）の（対話文の中にあって，所属形の名詞につき所属先を示す)

［４］あなた（二人称敬称)

an［人称接語］

［１］私（たち）が（一人称，対話文で用いられ，一項動詞の後ろに置かれてその主語となる．a[2]［２］，i[2] 参照)

［２］人（不定人称，一項動詞のan[1]であるかもしれない．一項動詞＋anの形のものは，anが人称接語であるのか動詞であるのかはっきりしないことがある）　』

一人称（a：［２］，［３］；an：［１］）は対話文の中にのみ認められるとしている．つまり，誰かが言った（語った）言葉（文）の中でのみ用いられるということである．a：［２］には，包括的一人称複数と引用の一人称を含めて考えることができるということであろうか．a：［３］で，所属形の名詞への所有格としての接続が言及されている．

田村[7]では，アイヌ語辞典の項目として，a／anの意味が次のようにまとめられている．

『a＝【人接】[不定人称主格他動詞型]

①［一般称］一般に　人は／人が，（特定の人ではなく）だれかが／だれでもが．

②［受身]...される．

③［包括的一人称複数］相手を含む私たちが／の．

④［引用文中の自称］自分（たち）が／の，私（たち）が／の．

⑤［敬意の二人称］あなた様が／の．

＝an【人接】[不定人称主格自動詞型]

①（一般称)(代名詞は使わない.）人が．

②（包括的一人称複数)(代名詞はaoká）相手を含む私たちが．

③（引用文中の自称）（代名詞は単数asinuma，複数aoká）自分（たち）が，私（たち）が（昔話をはじめ口承文学の中の用例のほとんどがこれである）．

④（敬意の二人称）（代名詞はaoká）あなた様が．

an＝【人接】[不定人称主格他動詞型][雅]（ユーカラ（英雄叙事詩）の主人公の自称）私が，私は．　』

aについての②［受身］が新出のカテゴリである．受身については，切替[5]でも，『［１］人（不定人称）（いわゆる受身の文に用いられることがある）』と言及されている．また，③，④，⑤で，所有格（「の格」）が加えられている．さらに，不定人称主格他動詞型an＝が辞書項目として設定されている．

以上みてきた従来の研究に基づいて，単数／複数の区別，主格／所有格の区別，文脈の区別を考慮して，また，少しの一般化を行いながら，a／anの用法の構成を次の**表１**のようにまとめる．

表１　人称接辞a／anの用法と文脈

人称	数	格	表現	田村による分類	文脈
一人称	単数	主格	私が	引用の一人称	引用での話者，物語での主人公
		所有格	私の		
	複数	主格	私たちが	包括的一人称複数	話し相手を含む一人称包括的複数 対話環境
		所有格	私たちの		
二人称	単数	主格	あなたが	二人称敬称	女性から成人男性への発話 対話環境
		所有格	あなたの		
	複数	主格	あなたたちが		
		所有格	あなたたちの		
不定人称	単数	主格	人／誰かが	不定人称	不特定の人・誰か 一般的な事象や規則の記述
		所有格	人／誰かの		
	複数	主格	人々／誰でもが		
		所有格	人々／誰でもの		

一人称と二人称は，文脈・状況に依存している．特に，引用，物語，対話という談話（発話）のタイプ，話し手，聞き手が女性か男性かといった情報が重要な手がかりとなる．不定人称は，「一般的な事象や規則の記述」の判定がむずかしい．不定人称については，複数の場合の例の提示も含めて，2.3節で考察を行う．人称接辞a／anの意味を考慮した日本語への翻訳においては，ここでまとめた文脈情報を手がかりとする仕組みを考えていかなければならない．

2.2　引用の一人称について

アイヌ語の談話の環境を大きく会話環境と物語環境に分けて考える．会話環境は，話し手と

聞き手がいて，お互いに対話をしている環境である．また，物語環境は，叙事詩などの口承文芸や昔話などにおける語り手が物語る環境である．会話環境は，話し手と聞き手の間に両方向の相互作用がある．物語環境は，語り手から聞き手への一方向的な作用の中にあり，聞き手は，主として受け手としての役割を演じることになる．物語全体が引用として構成されるとすれば，その引用の主体は引用の一人称として表現されることになる．しかし，物語の中に複数の登場物が含まれていて，それらが会話環境の中にあるという状況も考えられる．会話環境と物語環境を合わせて談話環境と呼ぶことにし，次のようにまとめる．

談話環境

対話環境　：　話し手と聞き手の両方向の相互作用的な環境．
話し手あるいは聞き手の対話の中に引用が含まれる可能性がある．

物語環境　：　語り手から聞き手への一方向的な環境．
語り手の談話の中に登場物の間の対話があれば，そこに埋め込まれた対話環境が構成され，その中に引用が含まれる可能性がある．

引用は次のような埋め込みの形で現れる．そこで用いられる主格人称接辞も併せて示す．

対話の話し手：話し手の表現：ku（主格）
聞き手：聞き手の表現：e（主格）

［対話　　［引用　　］　　］

引用の話し手：話し手（自身）の表現：a（主格）
聞き手：聞き手の表現　　：e（主格）

引用を含む文の表現と引用の一人称を含む具体例について見てみよう．

＜８＞kuneywa　ku=macihi　"　a=sapa　arka　wa　hopuni=an　ka　eaykap　"　sekor
hawean　kusu　，kani　patek　k=ek　ruwe　ne　．　（exp18002）
朝　私＝家内　「　私＝頭　痛い　て　起きあがる＝私　も　できない　」と
言う　ので　，　私　だけ　私＝来る　の　だ　．
朝，家内が「頭が痛くて起きられない」と言うもんだから，ぼくだけ来たんだ.[ϕ]

上の例では，引用が二重引用符（" "）で括られている．これは一般に書き言葉としての表現である．話し言葉の中には，このような二重引用符（" "）は明示的には存在しない．二重引用符で括らないで，人称接辞をa=，=anと表現するということであろうか．二重引用符なしの状態で表現されているときにkuと区別されなければならないということであるのだから．

＜＞　kuneywa　ku=macihi　a=sapa　arka　wa　hopuni=an　ka　eaykap　sekor
hawean　kusu　，kani　patek　k=ek　ruwe　ne　．　（exp18002）
朝，家内が頭が痛くて起きることができないと言うので，私だけ来たのだ．

ここで疑問に思うのは，引用の聞き手（２人称）に対応する表現がないということである．ア

イヌ語について，田村[1)]によれば，主格について，『１人称単数と除外的１人称複数以外の人称は，引用句の中でもそうでないときと変わらない.』ということである．つまり，引用句の中の２人称主格は，eのままであるということである．次のような例が示されている．

＜＞　"a–sapaha　arka　kus　nep　ka　kusuri　somo　e–kor?"　sekor　hawean　kor　ek　siri　un　.（田村[1)]：原著で明示されている記号’と´を省略している.）

（私の）頭が　痛い　から　何　か　薬　ない　（お前が）持ってい　と　言いながら　来た　の　よ　.

多くの文献で，引用を引用符（"　"）で括って直接話法に対応する形で表記しているが，話し言葉では，引用符で括れないところに問題があるのであって，引用符で括るのであれば，次のようにaはkuと書くべきであろう．eもそのままで書くことができるであろう．

＜＞　"ku–sapaha　arka　kus　nep　ka　kusuri　somo　e–kor?"　sekor　hawean　kor　ek　siri　un.

引用符がはずれることになるので，kuをaに，そしてeも何かに書き換えるという操作が必要になるとして，なぜ，eは書き換えなくてもよいということになっているのであろうか．さらに，次のような例も示されている．引用の中のeは引用の聞き手であり，この対話の聞き手ではない．引用の聞き手と対話の聞き手が同じ表現eによって表現される．

＜＞　"somo　e–ye　yakun　a–e–rayke　kusu　ne　na."　sekor　kane　a–ey–ye　p　ne　kusu.....（田村[1)]：原著で明示されている記号’と´を省略している.）

「ない↔（お前が）言わ　なら（私がお前を）殺すぞ」なんて（ひとが私に）言ったものだから.....

ここで，日本語の文章における引用（会話文）中の人称代名詞の解釈について考える．

＜a＞［花子が私を訪ねてきました．そして「私はあなたに本を贈りたい.」と言いました.］

＜b＞［花子が私を訪ねてきました．そして，私はあなたに本を贈りたいと言いました.］

＜c＞［花子が私を訪ねてきました．そして，花子は私に本を贈りたいと言いました.］

＜d＞［花子が私を訪ねてきました．そして，私に本を贈りたいと言いました.］

＜b＞での「私」と「あなた」は曖昧で，この文章の書き手である「私」と「花子」，あるいはその逆に「花子」と書き手である「私」の解釈が可能であると思われる．まず，「あなた」を「私」に変換して，＜c＞のように「花子は」を明示して表現するか，＜d＞のように「花子は」を省略してゼロ代名詞とすることによって曖昧でない文章となるであろう．直接話法から間接話法への変換の問題と考えることができるが，日本語では，書き言葉である文章中の会話は，＜a＞のように直接話法に相当する会話文を用いるのが一般的で，上のような問題はあまり起こらないと思われる．しかし，話し言葉では，アイヌ語と同じく，引用符（「　」）は明示的に表現することができないので，それを補う何らかの工夫が必要になる．例えば，ポーズや

イントネーションなどの語用論的な手段を用いるといった工夫である．アイヌ語の引用の一人称aの機能は，同じ問題に対する表現上での工夫の一つであると考えることができるであろうか．

2.3 不定人称について

不定人称は，会話文，物語の中の引用文などといった文のタイプに依存しないと考えられる．不定人称と判定するための文脈はどのような文脈であろうか．また，不定人称は，受動化とも関連するので，受動の表現への変換のしくみについても考察しなければならない．佐藤[8]は，a／anの用法として，不定人称文を『一般的な，「人が，誰もが」という意味で用いられる場合がある．このような意味で用いられたa-，-anを用いた構文を「不定人称文」と呼ぶ.』と規定している．いくつかの例を示して，日本語の訳としては，わざわざ主語を訳さないほうが自然な日本語となることも多い場合，受け身に訳しても不定的に訳してもよい場合，受け身に訳さなければならない場合があることについて述べている．そして，そこに示されている例での日本語訳は，すべての人称接辞に対応する表現は省略（φ化）されている．能動文と受動文の対応については，次のような図式（原著[8]の図式を簡略化）でまとめている．

『 能動文：「オオカミ神がシカ（複数）を殺す」

horkew kamuy yuk ronnu

オオカミ 神　シカ 殺す（複数形）

主語　目的語　動詞（三人称形）

yuk horkew kamuy oro wa a–ronnu

シカ オオカミ 神 所 から 不定人称—殺す

目的語　副詞句　動詞（不定人称形）

受動文：「シカがオオカミ神によって殺される」 』

アイヌ語の受動文では，「～によって」に当たる表現「oro wa（～の所から）」が付加される．また，日本語訳ではφ化が自然である．アイヌ語受動文を直訳すると次のようになる．

yuk horkew kamuy oro wa a–ronnu

シカを オオカミ神 によって 誰かが 殺す．

佐藤[8]は，『「シカ」は，目的語のままで，主語になっていないことが知られている．従って，アイヌ語の受け身文は，いわば能動文の構造を半分残したような，受け身文としては極めて特殊な構造をしていると言える.』と述べている．この「oro wa」は，動詞の日本語訳の受動表現への変換のための一つの手がかりを与える．

【 oro wa規則：「oro wa」受動文における不定人称接辞が付加された動詞の日本語訳は受動化する． 】

日本語訳におけるϕ化に特に注目しながら具体例を見てみよう．具体例は，主として，前節までと同じ対訳コーパスEXP（文献[3]より作成；exp），UPA（文献[4]より作成；upa）と切替によるアイヌ神謡集辞典[5]（yuk）を参照している．

＜９＞korkoni　a=kar　hi　ta　oro　ta　oka　korkoni　iteki　opitta　kar　.　opitta
a=kar　yakun　oyapa　an　kor　pon　korkoni　patek　hetuku　.
orowano　,　iyos　ek　kur　korkoni　kar　ka　eaykap　kusu　opitta
a=kar　ka　somo　ki　no　a=anu　yak　pirka　sekor　k=unuhu
en=eupaskuma　.　（upa03017）
フキ　人＝採る　とき　に　そこ　に　ある　フキ　な　全部　採る　.　全部
人＝採る　ならば　来年　なる　と　小さい　フキ　ばかり　生える　.
それから　,　あとから　来る　人　フキ　採る　も　できない　ので　みんな
人＝採る　も　ない　する　ように　人＝残す　ならば　よい　と　私＝母
私＝言い伝える　.
フキを採るときは，けっしてその場にあるフキを全部採り尽くしてはいけません．採り尽くしてしまうと，翌年そこに小さなフキしか生えてきません．そして，後から来る人が採れなくなるので，採り尽くさずに残しておくものだよ，と母は私に教えてくれました.[ϕ，ϕ，ϕ，ϕ]

フキを採るときに守るべき一般的なルールについて述べている．文脈としては，母が子どもに言い伝えているという状況である.「人が　フキを　採る」,「人が　フキを　残す」として能動が妥当であり，また，不定人称接辞のϕ化が自然な変換となる．

＜10＞amuspe　a=supa　wa　a=e　kor　sonno　keraan　pe　ne　na　.　（upa07006）
カニ　人＝煮る　て　人＝食べる　と　本当に　おいしい　もの　である　よ　.
カニは，ゆでて食べるととても美味しいものでしたよ.[ϕ，ϕ]

カニについての一般的な特徴について述べている.「カニを　人が　煮て，　人が　食べると」として能動が妥当であり，また，不定人称接辞のϕ化と，「を格」の主題化によって，より自然な日本語文に変換される．

「カニを　人が　煮て，　食べる　と」　⇒　「カニは　煮て　食べる　と」

＜11＞ipe=an　okake　ta　sey　ne　ya　puta　ikkew　pone　anakne　cise　soy　ta
sine　uske　ta　a=osura　.　（upa10014）
食事する＝人　後　に　貝　だ　の　豚　腰　骨　は　家　外　に
一つの　所　に　人＝捨てる　.
食べた後の貝殻や豚の腰骨などは，家の外の決まった場所に捨てました.[ϕ，ϕ]

＜12＞mun　a=nuwe　wa　a=umomare　hine　munkutausi　ta　a=osura　.　（upa10015）

ごみ　人＝掃く　て　人＝拾い集める　て　ごみ捨て場　に　人＝捨てる　.

掃除して集められたゴミは，「ゴミ捨て場」に捨てられました.[φ，φ，φ]

昔話の中で，人が誰でもしたことを記述している．同じような内容の記述で，＜11＞は能動，＜12＞は受動で表現されている．能動で表現するか，受動で表現するかについて一定の規則はないように思われるが，これをどのように考えるか．デフォルトは能動とする規則を設定することになるのだろうか.

＜13＞numaha　hure　p　anak　a=sitoma　p　ne　ruwe　ne　korka　,　numaha

kunne　kamuy　anak　pase　kamuy　ne　ruwe　ne　.　(exp09004)

体毛　赤い　もの　は　人＝恐れる　もの　だ　の　だ　けれど　,　体毛

黒い　クマ　は　えらい　神様　だ　の　だ　.

毛の赤いのはおそろしいもんだが，毛の黒いクマはえらい神様なんだ.[φ]

クマに関する一般的な事実を述べている．受動から能動への変換「人が恐れる」⇒「恐ろしい（恐い)」により，不定人称接辞のφ化が可能である.

「毛の赤いものは（を）　人が　恐れる.」⇒「毛の赤いものは（が）　恐ろしい.」

田村[7]には，次のような記述がある.

『sitomaシトマ【他動詞】...を恐れる，...がこわい（「おっかない」)．a–sitomaアシトマ（通常早く話しているときはiが落ちてastomaと発音される)（引用文の中で）私は...がこわい.(一般に人が)...を恐れる，(...は）恐ろしい.』

受動として表現したほうが自然な日本語となる例をみてみよう.

＜14＞kamuy　or　wa　aynu　a=rayke　oruspe　ku=nu　amkir　.　(exp09003)

クマ　により　て　人間　誰か＝殺す　話　私＝聞く　ことがある　.

クマに人が殺された話を聞いたことがあるよ.[φ]

＜15＞okake　ta　umma　or　wa　cikiri　a=otetterke　wa　simon　cikiri　isam　.

(upa06004)

後　に　馬　所　から　足　人＝踏みつける　て　右の　足　なくなる　.

その後リュウは馬に踏みつけられて右足を失いました.[φ]

上の２例は，「oro wa」を含む例で，受動として表現し，φ化することによって，自然な日本語訳が得られる.

＜16＞aep　ramacihi　anakne　sinrit　or　un　arpa　sekor　a=ye　.　(upa05003)

食べ物　魂　は　先祖　所　へ　行く　と　人＝言う　.

食べ物の魂は，先祖の所に行くと言われています.[φ]

食べ物の魂に関する一般的な事実を述べている．能動から受動への変換「人が言う」⇒「言われる（ている)」により，不定人称接辞のφ化が自然に行われる.

「・・・と　人は（が）　言う.」　⇒　「・・・と　言われている.」

切替[5]で,『[１] 人（不定人称)(いわゆる受身の文に用いられることがある)』としてまとめられている中から29例について，次に検討してみよう．29例の［アイヌ語：日本語：出典場所：[原著訳]：(切替辞典での動詞の意味)］を以下に示す.

（１）a are：～は置かれる：４－40，42：[a are kane：仕掛けて]：(～が～を座らせる；置く)

（２）a eerannak：人が～(場所)で～を気がかりに思う：５－79：[a eerannak pe：邪魔もの]：（～が～（場所）で～を気がかりに思う）

（３）a ekar：人が～で～をする：３－78．４－44：[nep a ekar pe：何に使ふもの，何にするもの]：(～が～で～を作る；為す)

（４）a enunuke：人が～を惜しむ（～は惜しまれる）：６－51：[a enunuke：勿体ない事]：（～が～を～に関してもったいなく思う）

（５）a eoripak：敬うべき～：６－49：[a eoripak okikirmuy：敬うべきえらいオキゝリムイ]：（～が～を敬う；畏れ慎む）

（６）a erannak：人が～を気がかりに思う：７－121：[nep a erannak pe：何の気がかり]：(～は～を気がかりに思う；～が～に困る)

（７）a kar：～は形を変えられる：６－52：[cep ne a kar wa：魚にされて☆]：(～が～を作る)

（８）a koeraman：～は理解される：１－26：[a koeraman：それがわかります]：(～は～から～がわかる)

（９）a koeyam：人が～（場所）で～を心配する：５－78：［nep a koeyam pe：何の危険も]：(～が～の事を～（場所）で気に掛ける)

（10）a korewen：～が失礼に取り扱われる：１－124：[a korewen siri：いぢめられたりしてるさま☆]：(～が～をいじめる（～をもてなすことに関して～は悪い))

（11）a mire：～は～を着せられる：１－159：[husko amip a mire wa：古い衣物を着せて]：（～が～に～を着せる）

（12）a okere：～は終わる（～は終えられる）：８－181：[iku a okere：宴を閉じた]：(～が～を終える)

（13）a otetterke：～は踏みつけられる：13－24：[a otetterke：何だか踏みつけられ☆]：(～が～を幾度も踏みつける)

（14）a piye：～は馬鹿にされる：１－124：[a piye hawe：馬鹿にされたり☆]：(～が～を馬鹿にする)

（15）a pukpuk：～はかみつかれる：12－42：[a pukpuk：噛みつかれ☆]：(～が～を噛みつき噛みつきする)

(16) a rekore：～は命名される：6－53：[a rekore ruwe ne：名づけられたのだ☆]：(～が～に名前を与える)

(17) a risparispa：～はむしられる：12－42：[a risparispa：噛みむしられ☆]：(～が～をむしりにむしる)

(18) a sanke：～は遣られる：1－161：[a sanke wa：使ひに出してやりました]：(～が～を取り出す；～が～を家から送り出す)

(19) a ukte：～は～を取らせられる：1－161：[aske a ukte：招待する]：(aske uk：～が～を招待する；aske ukte：～が～に～を招待させる)

[a un人が私(たち)を；私(たち)は(…される)(二項動詞，三項動詞の前に置かれる)]

(20) a un ekarkar：私は～をされる：1－144：[sipase ike a un ekarkar：最も大きいお恵みをいただき]：(～が～に対して～を行う)

(21) a un kasnukar：私は恵みをいただく：1－186：[a un kasnukar：お恵みをいただき]：(～(神)が～(人)に恵みを垂れる)

(22) a un koonkami：私は拝まれる：1－195：[a un koonkami：みんなに拝されました☆]：(～が～を拝む)

(23) a un numpa：私は締められる：4－51：[a un numpa：しめられる☆]：(～が～を締め付ける)

(24) a un omante：私は送られる：5－77：[a un omante：やられた☆]：(～が～を行かせる；～が～(神)を神の国に帰す)

(25) a un panakte：私は罰せられる：12－49：[a un panakte：罰を当てられ☆]：(～が～を罰する)

(26) a un rayke：私は殺される：12－50：[seta utar oro wa a un rayke：犬どもに殺され☆]：(～が～を殺す)

(27) a unin：人が～に痛みを感じる：5－53：[ne ike a unin pe tan：何で人が苦しむものか]：(～が～で痛みを感じる)

(28) a uytek：～は使われる：7－31：[kanto or un a uytek：天国へ使者に立つ]：(～が～(人)を(使者として)使う)

(29) a ye：～は(…と)呼ばれる；～は言われる：6－19，20，30，32，7－65：[ari a ye a：と言った；ari a ye ruwe：とよんでゐる；ari a ye a：と言ってゐた；ari a ye ruwe：と言ってゐる；a ye yakka：言われても☆]：(～が～に言う；～が～を名づける)

神謡集原著で，人称接辞aがφ化されなかったのは，29例のうち(22)と(27)の2例である．これらについては，3章で考察を行う．また，切替神謡集辞典[5]での動詞の意味(日本語での意味)は能動である．能動の意味が第1義としてあって，文脈・状況に応じて受動化され

るとすると，どのような文脈・状況が受動化の手がかりとなるのであろうか．上の29例中，神謡集原著で受動として翻訳されているのは，次の13例（上の記述中の☆印）である．

（７），（10），（13），（14），（15），（16），（17），（22），（23），（24），（25），（26）

（29の一部７－65）

このうち，【oro wa規則】の適用例は（26）である．それ以外の例（の一部）について，次のような手がかりを取り出すことができるであろうか．

（イ）a＝＜動詞＞：動詞が［人が他の人あるいは何かから被害的な行為を受ける動作］という意味を持っているとき，受動化する．

（ロ）a=un＝＜動詞＞：動詞が［能動］の意味を持っているとき，受動化する．

また，（29）の「a ye」５例について，受動化は１例のみである．例＜16＞も併せて考えて，「a ye」の日本語訳は必ず受動化しなければならないということではないように思われる．受動化のための手がかり（方略）については引き続き考察を進めていきたい．

３．人称接辞a／anの日本語への翻訳

本報告における考察の問題点は，人称接辞a／anの日本語への翻訳をどのように行うかということである．２章で，用法の分類を行う中で，具体例も示して，そこに含まれる人称接辞の日本語訳が省略（φ化）されているかどうかということについても同時に見てきた．２章に出てきた番号付きの16例については，人称接辞a／anの日本語訳がすべて省略（φ化）されている．例えば，包括的一人称複数の例＜１＞，＜２＞について，“私達”がφ化されても，包括的一人称複数であることは文脈から理解される．

＜１＞cep　a=supa　wa　a=e　ro　！　（exp06003）

魚　私達＝煮る　て　私達＝食べる　よう　！

魚を煮て食べよう！［φ，φ］

＜２＞tanto　ku=nepki　kusu　，nisatta　sinot=an　ro　．　（exp05004）

今日　私＝働く　から　，　明日　遊ぶ＝私達　よう　．

今日は仕事をするから，明日遊びましょう.[φ]

不定人称の例＜７＞についても，“人”がφ化されても，不定人称であることは文脈から理解される．

＜７＞ihuraye=an　oka　ta　nupki　anakne　iteki　pet　or　un　kuta　sekor

ku=kor　huci　hawean　．　（upa02008）

洗濯する＝人　後　に　汚れ水　は　な　川　所　へ　あける　と

私＝持つ　おばあさん　言う　．

洗濯のあと汚れ水は川に決して捨ててはいけないと祖母は言います.[φ]

さて，ここで，以上の16例による結果を一般化し，出発点としての方略として，次のような方略を設定する．

【　人称接辞a／anの日本語への翻訳のための基本方略：

人称接辞a／anの日本語訳はφ化する．　　】

【文脈から復元可能な要素はφ化する．】というより一般的な規則が出発点となる．文脈から復元可能な要素を省略（φ化）することによって，文章の結束性が強まり，文章理解過程における処理の負荷も減少するという議論が可能である．文脈から正しく復元することのできないa／anの訳（意味）はどのような状況で現れるのであろうか．具体的な例についての調査を行いながら，この基本方略からの次の一歩を検討してみよう．対訳コーパスEXP[3]とUPA[4]，アイヌ神謡集（切替[5]，片山[9]）について調査を行った結果が**表 2** である．

表 2　人称接辞a／anの日本語への翻訳

コーパス／辞典	総　数	φ　化	明　示
EXP	28	28	0
UPA	118	116	2
切替神謡集（原著訳）	63	57	6
片山神謡集（現代日本語訳）	62	55	7

＊切替神謡集（アイヌ神謡集辞典[5]：知里幸恵訳）
＊片山神謡集（「アイヌ神謡集」を読みとく[9]：現代日本語訳）

UPAにおいて明示されている例は次の２例である．

①＜upa08011＞okkayo　matkaci　kopisi　wa　ene　hawean　hi　,　tan　cep　hunna　koyki　ya　?　matkaci　ene　yaynu　hi　,　a=onaha　ki　sekor　a=ye　yakun　okkayo　a=onaha　kopasrota　sekor　yaynu　kusu　,　asinuma　a=koyki　cep　ne　sekor　hawean　.

その男は彼女に尋ねた．このサケは誰が獲ったのか，と.「父親が獲ったと言えば，父が叱られる」と思って，彼女は「私が獲りました」と答えました．

問題の部分を取り出して，単語直接翻訳すると次のようになる．

＜＞　asinuma　a=koyki　cep　ne　sekor　hawean

私　私＝捕る　魚　である　と　言った

この単語直接翻訳からの自然な日本語訳は次のようになるであろうか．

＜＞「私が捕った魚です.」と言った．

「私」は，aの訳ではなく，代名詞asinumaの訳であるとすると，これはφ化となる．代名詞が同時に出現している場合には，人称接辞ではなく，代名詞が明示されると考える．

②＜upa10004＞sine　uepeker　or　ta　munciro　oruspe　an　.　rupne　munciro　patek　a=ca　wa　nokan　munciro　nen　ka　ca　ka　somo　ki　wa　cis　kor　an　.

ある昔話にアワの話があります．大きなアワばかり人は収穫していって，小さなアワは，誰

も刈ってくれないので泣いていました．

この例のaに対する単語直接翻訳「人は」のφ化は微妙である．

大きなアワばかり人は刈って，小さなアワは，誰も刈ってくれないので泣いていました．

P１　　Sは　　P２

S（「小さなアワ」）はP２の主語であるが，P１の主語ではない．P１の主語（「人」）を明示しないと全体としての文の容認度がさがる．P１の主語が省略されても文脈から復元できればφ化可能であるが，そうでない場合は明示するほうがよいということになる．一般化すると，

【　人称接辞a／anの日本語への翻訳のための例外処理方略１：

「P１（人称接辞a／anの日本語訳S１を主語とする），Sは，P２」という

パターンにおいて，SがP２の主語で，S１と異なるとき，S１は明示する．　】

原著神謡集（切替[5]）で，明示されているのは以下に示す６例である．

①５－53　"　Enean　pon　noyaai / neike　auninpe　tan?　"　ari

"　ene　an　pon　noya　ay / ne　ike　a　unin　pe　tan?　"　ari

「あんな小さな蓬の矢，何で人が苦しむものか」と

５－54　yainuash　kane / chinotsephum / taunatara,

yaynu　as　kane / ci notsep hum / tawnatara,

思ひながら私は牙を打鳴らして

この例での引用句（「　」）の内容は，物語の主人公の思いであるとすると，aの訳は一人称単数「私（が）」が妥当であると考えられ，その場合はφ化しても問題ないと思われる．

「あんな小さな蓬の矢で，何で私が苦しむものか」と思ひながら私は牙を打鳴らして

「あんな小さな蓬の矢で，何で［φが］苦しむものか」と思ひながら私は牙を打鳴らして

また，不定の「人」と考えて，φ化しても問題ないと思われる．

②１－195　Chiokai　nakka / aunkoonkami.

ciokay　nakka / a　un　koonkami.

私もみんなに拝されました．

単語直接翻訳では，「私　も　（不特定の）人が　私を　礼拝しました」となり，これをφ化すると，「私も　私を　礼拝しました」となって，容認できない文となる．これは，受動文「私も礼拝されました」とすると，φ化しても妥当である．切替[5]にあるように，「a un：人が私（たち）を；私（たち）は（・・・される）」というパターンにおいては，動詞を受動化した後，φ化するという規則を考えることができる．

【　人称接辞a／anの日本語への翻訳のための例外処理方略２：

「a un 動詞（二項動詞／三項動詞）」というパターンにおいては，

動詞を受動化した後，人称接辞a／anの日本語訳をφ化する．　】

原著神謡集での「みんなに」という明示形生成のしくみをどのように考えたらよいであろうか.

③1－61 " Shirun hekachi / wenkur hekachi
" sirun hekaci / wenkur hekaci
「にくらしい子，貧乏人の子
1－62 hoshki tashi / aki kushnep / eiyetushmak ”
hoski tasi / a ki kusne p / e i etusmak ”
私たちが先にしようとする事を先がけしやがつて.」

これはφ化しても容認可能である．明示するとすれば，この文脈では，単数「私（が)」であると思われるが，なぜ複数「私たち」という訳が充てられたのであろうか．片山神謡集・現代日本語訳[9]では「オレたちが先にしようとしていたことを先にやりやがって」と明示されていて，解説では，常套句として，「先にオレがしようとしたのに（先がけしやがって)」という訳が充てられている．

④1－187 tan tewano / kotanepitta / shine utar
tan tewano / kotan epitta / sine utar
今から村中，私共は一族の者
1－188 ane ruwene kushu / uwekatairotkean
a ne ruwe ne kusu / uekatayrotke an
なんですから，仲善くして

これもφ化可能であると思われる．片山神謡集・現代日本語訳[9]では，「これからは村中一つなんですから」という訳が充てられている．

次の二つは，一人称複数所有格の例である．物語の主人公としての一人称単数「私の」が優先的である神謡において，「私たちの」であることを明示することを意図したのであろうか．φ化して省略しても文脈から復元理解可能であると思われる．

⑤4－15 ehoyupu wa / eoman wa
e hoyupu wa / e oman wa
お前は走つて行つて
4－16 akor kotan / kotanoshmakta / eshirepa chiki
a kor kotan / kotan osmak ta / e sirepa ciki
私たちの村の後へ着いたら

⑥4－101 Tewano okai / autarihi, / opittano, / enepakno
tewano okay / a utarihi, / opittano, / ene pakno
これからの私たちの仲間はみんなこの位の

4－102　okai　kunii　ne　nangor.
okay　kunii　ne　nankor.
からだになるのであらう．

片山神謡集・現代日本語訳[9]では，さらに次の2例が明示されている．これらは原著神謡集ではφ化されていて，φ化しても容認可能である．

①1－182　"　Tapne　tapne / wenkur　ane　wa / raukisamno
"　tap　ne　tap　ne / wenkur　a　ne　wa / rawkisamno
「此の様に，貧乏人でへだてなく　（原著訳）
「このように私どもが貧しかったために，分けへだてなく

②12－49　enean　irara / chiki　kushu / aunpanakte,
ene　an　irara / ci　ki　kusu / a　un　panakte,
あんな悪戯をしたので罰を当てられ　（原著訳）
あんな悪いいたずらをしたので，私は罰を受け

ここまでのところ，例外規則は2つである．

4．おわりに

アイヌ語日本語機械翻訳システムの構築のための基礎的な考察として，アイヌ語人称接辞a／anの用法の分類と，日本語への翻訳の具体的な状況と翻訳のための規則について考察した．具体例に基づく考察により，まず「人称接辞a／anの日本語訳のφ化」という基本規則を設定した．そして，それに例外規則を追加するという方向での考察を進めた．調査検討した具体例の中で，例外規則を用意すべき例は2例であった．さらに調査検討を進めなければならないが，例外規則は少数であると思われる．つまり，ほとんどの場合，アイヌ語の人称接辞a／anの日本語訳の照応要素は，文脈から予測可能な要素であると考えてもよいということであろうか．日本語文章における省略現象において，不定の表現「人，誰」が省略されない場合はどのような場合なのかという問題とも関連する．人称接辞aについては，動詞の受動化との関連についても検討を進めた．どのような場合に受動化が行われるのかについて限られた例に基づくものではあるが，基礎的な考察を行った．さらに，a／an以外の人称接辞の日本語訳のφ化についての調査検討と規則の構成も今後の課題である．a／an以外にも多義の人称接辞がいくつかある．本報告で参照した文献に加えて，さらに関連する文献[10～14]も参照しながら，アイヌ語の人称接辞の日本語への翻訳におけるφ化の問題について考察を進めていきたい．

謝辞

本研究の一部は，文部科学省「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」による援助を受けて

行われました．ここに記して謝意を表します．また，電子情報工学科切替英雄先生には，アイヌ語文法についてご教示をいただき，さらに，先生が作成されたアイヌ神謡集辞典の電子化データを利用させていただいていることに深く感謝いたします．

参考文献

1）田村すず子：アイヌ語沙流方言の人称代名詞，言語研究，59，1971．In アイヌ語考④文法Ⅱ，ゆまに書房，pp.263–276，2001．
2）中川裕：アイヌ語の人称接辞―とくにa–をめぐって―，国文学解釈と鑑賞，52–2，1987．In アイヌ語考⑤文法Ⅱ，ゆまに書房，pp.4–10，2001．
3）中川裕，中本ムツ子：「エクスプレス　アイヌ語」，白水社，1997．
4）中本ムツ子，片山龍峯：「アイヌの知恵　ウパシクマⅠ，Ⅱ」，片山言語文化研究所，1999，2001．
5）切替英雄：アイヌ神謡集辞典，大学書林，2003．
6）田村すず子：アイヌ語沙流方言の人称の種類，言語研究，61，1972．In アイヌ語考④文法Ⅱ，ゆまに書房，pp.370–392，2001．
7）田村すず子：アイヌ語沙流方言辞典，草風館，1996．
8）佐藤知己：アイヌ語文法の基礎，大学書林，2008．
9）片山龍峯:「アイヌ神謡集」を読みとく，草風館，2003．
10）田村すず子：アイヌ語石狩方言の人称代名詞と人称接辞，金田一博士米寿記念論文集，三省堂，1971．In アイヌ語考④文法Ⅱ，ゆまに書房，pp.330–356，2001．
11）田村すず子：アイヌ語，「言語学大辞典セレクション：日本列島の言語」，三省堂，1997．
12）中川裕：アイヌ語千歳方言辞典，草風館，1995．
13）中川裕，中本ムツ子：カムイユカㇲでアイヌ語を学ぶ，白水社，2007．
14）浅井亨：言語　アイヌ語の文法―アイヌ語石狩方言文法の概略―，In「アイヌ民俗誌」，アイヌ文化保存対策協議会編集，児玉作左衛門，犬飼哲夫，高倉新一郎監修，第一法規出版，pp.771–800，1969．